

# 植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策

李 良 姫

はじめに

1. 朝鮮鉄道と観光開発
2. 植民地統治政策としての観光
3. 植民地化における女性と観光
4. 植民地と戦後の観光政策

おわりに

## はじめに

戦後の韓国における日本植民地時代の研究は、長きに渉り日本の植民地政策及びその結果への批判を基調としたナショナリズム色の強い研究が主流であったことは否めない。1980年代に至って、より学術的かつ実態解明性を志向する「植民地近代化論」が登場することになるものの、植民地政策による韓国近代化への言及を行うことは、依然として大変困難な社会的・学術的な雰囲気が残存している<sup>1</sup>。

このことを前提とするならば、韓国における日本植民地時代の研究は、植民地政策が日本の軍事、政治、経済のために行なわれてきたという批判に重きが置かれ、朝鮮総督府の多くの施策が戦後の韓国政府によって引き継がれており、現在の朝鮮半島のある種の基盤に対して少なからず影響を与えているという事実、そしてそうした事実立脚した上で歴史を相対化し、さらにそこから韓国社会を立体的に捉えていくという研究が未だ充分になされていないことは容易に理解できよう。但し、そこで注意すべきなのは、たちまち「植民地近代化論」や「日本統治再評価」に結びつけてはならないということであり、あくまで研究は事実の発掘に徹するという姿勢である。

小論では、上のような問題意識を内在させた上で、日本植民地時代にインフラの整備など朝鮮が観光開発され、大衆観光化していく過程について考察を行う。その上で、日本の植民地政府が積極的に観光開発を行った意図は何であったのかについての初歩的な検討を行いたい。とはいえ、筆者の研究上の射程には、植民地観光政策が戦後の韓国における観光政策にどのような影響を及ぼしたのかを究明することが含まれており、このため小論は、さしあたり「植民地を行った側の資料」を中心に用い検討を行っていくという限定的で基

礎的な作業として位置付けられるものであることを付言しておく。

## 1. 朝鮮鉄道と観光開発

### (1) 鉄道の役割

朝鮮と同様に、日本の植民地下に置かれた台湾では、「台湾植民地鉄道は植民地鉄道の典型であり、砂糖や石炭、木材などを台湾各地から日本に移出し、日本から工業製品を移入する輸送網を形成した。こうした輸送網から旅客機関として発達することによって、台湾での近代ツーリズムを発達させた」と指摘される<sup>2</sup>。これと同様に、朝鮮においても、朝鮮総督府鉄道局の交通手段の整備は、朝鮮観光に大きな役割を果たしている。

朝鮮における鉄道建設は、1892年に鉄道技師河野天瑞を派遣し、京城から釜山間の鉄道線路の踏査を行ったことを契機として、1899年に京仁線（京城＝ソウル - 仁川を結ぶ鉄道）、1905年には京釜線（京城 - 釜山を結ぶ鉄道）、1906年には京義線（京城 - 新義州を結ぶ鉄道）、1910年には平南線（平壤 - 南浦を結ぶ鉄道）、1914年には湖南線（大田 - 木浦を結ぶ鉄道）が建設された<sup>3</sup>。

日本による韓国併合以前に、朝鮮で最初の鉄道管理局であった「統監府鉄道管理局」が1906年7月1日に設置された。この統監府鉄道管理局には、総務部と管理部、工務部が設けられ、京釜線を管理するようになる<sup>4</sup>。1907年5月16日には、既に「鉄道案内者」と呼ばれるガイドが京釜線の出発駅であるソウルの南大門駅と、終点釜山の手前の駅である草梁駅に置かれ鉄道案内を行っていた<sup>5</sup>。また1908年7月1日には、統監府鉄道管理局は近代ツーリズムの創始者であるトマス・クックとその息子が経営していた「トマスクック・アンド・サン」社及び「イギリス寝台会社東洋支配人」との協定を結び、外国人観光客に対する乗車券の代理発売を委託し、外国人観光客の朝鮮旅行の便宜を計った<sup>6</sup>。

1909年6月18日、統監府鉄道管理局は統監府鉄道庁と名称を変えた。また同年12月16日には、鉄道院に移管され、「韓国鉄道管理局」となった<sup>7</sup>。その後、1910年8月22日の韓国併合により、8月29日に朝鮮総督府が設置されたのに伴い、10月1日には朝鮮総督府の行政機関の統合整理により、鉄道院韓国鉄道管理局が廃止され、朝鮮総督府鉄道局が設置された。

鉄道の発達、日本人の満州・朝鮮への観光客誘致はもちろん、朝鮮人の日本への渡航、国内旅行へも影響を与えた。1922年に実施された調査では、朝鮮鉄道の旅客の民族別構成は、乗車人員1,382万人中、日本人が17.2%、朝鮮人が80.2%であった<sup>8</sup>。また、朝鮮鉄道の旅客数は、1910年に2,024,490名、1919年に12,184,485名、1927年に20,058,401名、1936年に33,906,129名、1938年に45,053,752名へと達する<sup>9</sup>。さらに、朝鮮総督府が観光開発にもっとも力を入れていた朝鮮の観光名所「金剛山」の事例から、鉄道整備が観光客増加に影響を与えたことが伺える。すなわち、1925年に186名だった金剛山観光は、鉄道の整備により1938年には24,892名に達した<sup>10</sup>。

上掲したような、旅客数を民族別に区別し統計を出している資料は、管見の限り他にはなく、そのため年次を追って詳細な分析をすることはできないが、年々増加する乗客数に鑑みて、朝鮮における鉄道の発達は、朝鮮人の国内観光を大衆化させていく導因になったと考えられる<sup>11</sup>。

韓国人研究者鄭在貞は、植民地鉄道が朝鮮内での物資流通や旅客の輸送、朝鮮経済の形成よりは日本経済の外延的拡大及び大陸侵略における動脈の役割を果たしていたとしている<sup>12</sup>。しかし、鉄道が朝鮮内の経済活性化や朝鮮人の主要な移動手段にもなっていることを考えれば、一面的な論断であろう。朝鮮鉄道の開通は、朝鮮内での貨物や旅客の輸送の両面で利用されていたとするのが実態に近いと思われる<sup>13</sup>。

## (2) 鉄道案内書

朝鮮総督府（それ以前には韓国統監府）は、鉄道案内を中心とした朝鮮旅行の案内書の発行にも積極的であった<sup>14</sup>。統監府鉄道管理局は、1908年に『韓国鉄道線路案内』を発行している<sup>15</sup>。この案内書は、京釜線と京義線の周辺駅について詳細に紹介している。各駅周辺の名勝地をはじめ、旅館、料理屋、交通関係、人力車の料金、通信、貿易、産業、主な機関、人口までが詳しく書かれている。この案内書は、朝鮮における最初の本格的な観光案内であった。また、京元線（京城 - 元山を結ぶ鉄道）全線開通2年前の1912年に発行された『朝鮮鉄道線路案内』には、京元線各駅の案内が掲載されており、たとえば鉄原駅の項では、「金剛山は駅の東方21里半島中著名なる一大霊場にして、其の雄大なる景勝は東洋無比と称される」などと紹介されている<sup>16</sup>。

その後、朝鮮総督府鉄道局より鉄道沿線を中心とした朝鮮鉄道旅行案内書が数多く発行され、朝鮮は観光地として内外に広く紹介されることになる。また、それに併せて朝鮮総督府鉄道局は、朝鮮に関する葉書を数多く発行している。これらの葉書は、朝鮮の風景や美しい自然、人々の生活が大部分である。また、交通手段、費用、案内者、宿泊施設の案内などが掲載されてあるものもあり、葉書やそれを収める小冊子だけでも十分に朝鮮観光ができるようなものであった。

朝鮮総督府鉄道局の広報活動の中で最も積極的に行なわれていたのは、観光映画制作である。鉄道局は、旅客の誘致のために観光映画制作を積極的に行っていた。それらは内地に限らず海外向けに朝鮮の名勝や風俗を紹介し、国際観光を目的としたものもある。当時、朝鮮の観光宣伝のために制作された映画には、『朝鮮の旅』、『金剛山』、『四季の行事』、『朝鮮の展望』、『新羅王朝の跡を尋ねて』、『羽衣天女物語』などがある<sup>17</sup>。また、制作年度は不明であるが、朝鮮総督府により制作された宣伝映画『TYOSEN』は、英語のナレーション付きで、金剛山の奇岩絶壁や山の風景を紹介しており、さらに金剛山の神溪寺なども見せている。また慶州の寺院などや美しい朝鮮女性の洗濯場面、朝鮮の生活全般を紹介している。加えて、朝鮮が空路と海路で日本と中国に繋がっていることが強調されており、朝鮮神宮や朝鮮ホテル、朝鮮総督府庁舎などを写し出す。そうして朝鮮の自然景観を見に来

るよう勤めるナレーションで終了する。この映画は、朝鮮観光を諸外国に宣伝し、外国人の観光客を誘致するために制作されたものであることは疑い得ない。

このように制作された映画は、東京、大阪、下関の「鮮満案内所」に配給された。当時の、朝鮮紀行文には、この鮮満案内所から朝鮮への旅行情報を得ていたことが記されており、この鮮満案内所は、金剛山をはじめ朝鮮旅行案内に一役買っていたことが分かる。朝鮮総督府鉄道局では、案内書や映画制作など朝鮮観光の宣伝を積極的に行い、また積極的に流布していたのである。

### (3) 朝鮮鉄道と満鉄

植民地台湾においては、「本来は産業線として建設された台湾植民地鉄道だったが、官設鉄道と私鉄および軌道が結合し、台湾西岸地域を中心に稠密な旅客輸送網を展開し、重要な旅客輸送機関として発達した」と指摘される<sup>18</sup>。これとは若干異なり、朝鮮鉄道の多くは、その最初の段階から、産業線に加え観光客の便宜を図るための鉄道として活用されてきた。従って、朝鮮総督府鉄道局は、直営以外の朝鮮で運行されていた私鉄とも緊密な連携を行っていた。例えば、朝鮮総督府と金剛山電気鉄道株式会社は、連携して金剛山探勝券の販売などの業務提携を行った。そのことは朝鮮総督府発行の『官報』に告示されている<sup>19</sup>。

1917年から1924年までの朝鮮における鉄道経営は、南満州鉄道株式会社が経営委託を受けていた。前出の鄭在貞によれば、朝鮮鉄道は、「日本の緻密な構想の基に韓国を政治的・経済的・軍事的に制圧し、また日本と満州を時間的・空間的に最大限密着させるために特別に敷設された」<sup>20</sup>。朝鮮鉄道経営を南満州鉄道株式会社が経営委託を受けるようになった背景には、1910年に初代朝鮮総督として着任していた寺内正毅の強い意向が存在した。寺内は、後に内閣総理大臣に就任した際、南満州鉄道株式会社に朝鮮鉄道の経営を委託することを実現させた。朝鮮と満州とを連結した鉄道政策や経済政策を実施し、満州と朝鮮の一本化を目的としていたと考えられる<sup>21</sup>。

経営委託により朝鮮総督府鉄道局が直営していた鉄道の経営やホテルの経営を南満州鉄道株式会社が行った。そのため、この時期の朝鮮の観光案内書やパンフレットの作成は南満州鉄道株式会社によって行われている。朝鮮旅行のパンフレットは、経営主体が変わっても、その内容についてはそれほど変わっていない<sup>22</sup>。南満州鉄道株式会社が発行していたこれらのパンフレットは、満鮮案内所などで配布されており、朝鮮旅行をする観光客の良い案内書であったことも同様である。

## 2. 植民地統治政策としての観光

### (1) 満州・朝鮮への観光「視察」

植民地初期の段階においては、当時の満州・朝鮮の産業、地理、国土、気候、交通の状況を視察する観光が盛んに行われた。視察を行ったのは行政官僚だけでなく、時間と財力

のある実業家も多かった。それは無論のこと植民地政策と無関係ではない。朝鮮総督府が直接日本から満州・朝鮮視察団を誘致した記録は見当たらないが、訪朝視察団に対して様々な便宜を図っていたことは散見される。

こうした際の視察の名目は、満州・朝鮮への殖民、開拓に投資するのは臣民としての務めであり、それに資するというものであり、こうした意識により視察は支えられ、実際に見聞することでその意欲をさらに高め、また満州・朝鮮において名士扱いされることで視察者は優越感を感じることができた。

たとえば、1909年9月3日から9月30日まで実施された、下野新聞社主催の「満韓観光団」は、栃木県在住の実業家34名が栃木を出発し、約1ヶ月もの間、満州・朝鮮を巡る視察を行った。その翌年、下野新聞社は、詳細な視察目的、参加者、日程、感想などを著した『満韓観光団誌』を発行している。当時、満州・朝鮮の視察後には、視察の日程や感想、訪れた地域の産業、風土などが書かれた観光団誌や報告書などが相次ぎ刊行されている<sup>23</sup>。

『満韓観光団誌』によれば、視察団は、土地の産業、経済の状況を把握するため、現地の商業会、役所、有力者の邸宅で談話と歓迎会を行ったという。そこでは、どのような分野において投資を行うことが有望であるのか否かということについての情報の入手が中心であった。それも主として日本人同士の取引を前提とし、朝鮮人と取引をするという意識はなく、人も土地も日本人によって開発されるべきものという感覚をもっていたことが伺われる。朝鮮人は主体的な人間として捉えるべきでなく、未開な人たちだから指導しなければならないということが、そこでは繰り返して述べられている。一部の朝鮮人の上流階級について、風雅を解し品性があり、また日本語を上手く操ることを誉めているが、一方で彼らの収賄行為について批判をしている。

視察団が面会した現地の日本人は、理事官や商業関係者、事業成功者が主であり、自らの事業を展開する上で互いに利益が得られるような人たちと交流をしていた。朝鮮人の側は、観察使、郡守などの権力者が中心であった。前出の『満韓観光団誌』には、どこへ行っても国賓級の歓待を受けたこと、さらに日本と朝鮮の両国民の歓迎を受けたことが繰り返し述べられている一方で、一般の人々と直接会話をしたり、交流を持ったりしたことは描かれていない。彼らが面会し、会話を交わしたのは、上流社会の人々のみであった。その中で、平安南道観察使の李は、歓迎会の席で「栃木県の実業家諸氏と会見するの機会を得たるは、誠に望外の光栄なり」と語っている。朝鮮の有力者にとっても、日本からの視察団と面会することは、光栄なことであり、利益にかなったことであった。

朝鮮の仁川では、日露戦争の際にトリヤーク号が撃沈された場所や当時の状況について説明を受けたり、日清戦争の際の戦死者を祀った神社を訪れ参拝したりした。平壤では日露戦争の戦死者の墓地に参拝している。実業家の視察は、殖民、開拓のために満州・朝鮮の地理、国土、気候、交通を知る目的を持っていた。満州・朝鮮には官の力だけでなく、民の力の投入が必要であることに鑑み、時間と財力のある者が満州・朝鮮への殖民、開拓



に投資するのは臣民としての務めであり、実際に見聞することでその意欲を高めるだけでなく、名士扱いされることで優越感を感じるように仕向けられたものであった。

以上のごとく、下野新聞社が主催した満韓視察団の目的は大きく二つに分けることができる。第1に、日清、日露戦争後の戦跡地を訪ねることにより、日本はその戦争に勝利した列強国であり、世界に目を向けなければならないとの優越感と開拓への意欲を与えることである<sup>24</sup>。第2に、植民地化によって朝鮮が初めて開発されたということと、朝鮮人を勤勉な良民に変えなければならないという自覚を持たせること、すなわち、「遅れた」朝鮮人の実態を見せることにより、日本人が彼らのために朝鮮を統治しなければならないと思わせ、植民地の正当化をはかることであった<sup>25</sup>。こうした目的のために、視察が頻繁に行なわれたのである。

また、併合前後から、満州・朝鮮への観光団が結成されはじめ、日本から満州・朝鮮への観光旅行が数多く行われた。新聞社が主催する観光団が最も多く、次いで実業団体をはじめとする各種団体などの主催する観光団が結成されていった。

朝日新聞社が主催した「満韓巡遊船」は、1906年7月25日から8月23日の30日間の日程で行なわれた。1906年6月22日の朝日新聞紙上で大々的にこの企画が発表され、その4日後には、定員を全て充たしてしまったというほどの大変な人気ぶりであった。389名の参加者は、すべて男性で、大阪から参加した人が最も多かった。次いで多かったのは東京からの参加者であった。参加者の職業を見てみると、商業従事者が最も多く、次いで学生であった。

視察の過程を辿ってみると、この観光団の前半の旅は、日露戦争勝利の原動力であった工業力・軍事力を見学することが、日清・日露戦争の勝利の軌跡を追うことと併せて、ひとつの目的であったようである<sup>26</sup>。朝鮮では、日清戦争の戦跡地を見学している。次いで、大連 遼陽 奉天を巡り日露戦争の戦地を見学することで、参加者たちは、日本軍の勝利という歴史的事実を実感したことであろうことは想像に難くない。そうして、日本軍によって支配され、さらに帝国を拡大する必要性を、その地を観光することによって、人々に伝えようとしたのだと考えられる。

概略以上のような満韓巡遊船の旅を、先行研究は以下のように考察している。「満州韓国は、日清戦争・日露戦争の戦勝という歴史的記憶が埋め込まれた土地であり、同時に今や帝国日本の『皇威』の実現する土地、さらに今後の日本の勢力が拡大進出すべき土地であった。満州・韓国は、帝国民にとって過去、現在、将来を貫通する特別な物語が語られてきた土地であるからこそ、旅行すべき土地だったのである。旅行は、帝国日本の達成という物語を最前線の現地において視認する旅行と位置付けられていたのである」<sup>27</sup>。つまり、こうした旅行の目的は、人々に帝国臣民としての意識を高めることにあると言えるようである。

それではなぜ、朝鮮総督府は朝鮮への視察に協力的であったのだろうか。これに関して

は、当時朝鮮総督府政務統監であった水野錬太郎の演説が端的に物語っていると思われる<sup>28</sup>。彼は、朝鮮を統治するためには朝鮮を知るべきであり、特に青年たちに朝鮮を理解してもらう必要があると考えた<sup>29</sup>。

要するに、朝鮮総督府の思惑は、その統治方針を周知し、共感を求めるということに尽きるであろう。換言すれば、視察団に朝鮮総督府の統治の「正しさ」をアピールしていたのである<sup>30</sup>。「幸いにして日本の保護の下において、朝鮮は漸次開発され、朝鮮人の幸福は段々と増進した」<sup>31</sup>ことが述べられていることから察すれば、朝鮮への視察に対する積極的な協力は、植民地統治の正当性と政策の成功をアピールするためであったと結論づけられる。

かくして、日本植民地初期の満州・朝鮮への視察・観光は、日清・日露戦争に勝利したプライドの確認と未開の国、遅れた国を植民地にすることの必然性、また発展させるための高揚を鼓舞するものであったと考えられるが、植民地統治が成熟して以降は、植民地政策の成功をアピールし、それを衆目のところとするための視察・観光に変質したということである。

## (2) 満州・朝鮮への修学旅行

次に、学生を対象を絞り、満州や朝鮮を旅行地とした修学旅行に焦点を絞って検討してみたい。白幡によれば、修学旅行の端緒に関して次の通りであるという。「注目すべきは、初期の修学旅行を実施した団体に師範学校が多かった点である。将来、国民教育に直接たずさわることになる人物、未来の教師たちをまず教育し、その身体鍛錬を行なうという意義が考えられたのだろう。新しい教育科目としての修学旅行は、師範学校によって率先して取り入れられた」<sup>32</sup>。

具体的には、1884年10月17日に埼玉県師範学校において「生徒之遠足」が挙行され、1885年には同学校の「擬行軍」が実施されるが、これが日本における修学旅行のはじまりであるという<sup>33</sup>。翌年、大坂府師範学校の「行軍」と、福岡県豊津中学校の「遠足会」が行なわれ、1887年になると、修学旅行は全国的に普及するようになる。ところで、修学旅行という名称が使われ始めるのは1886年である。修学旅行は、現在もしばしば用いられている「遠足」と、軍事的なイメージの浮かぶ「行軍」の総称であった<sup>34</sup>。

こうした修学旅行の対象地は、当初は博物館、動物園などであった。海外への最初の修学旅行は、1896年に行われた兵庫県立豊岡中学校の満鮮旅行である<sup>35</sup>。「1902年には、福岡市商業学校が行商旅行を行なった記録が残っている」<sup>36</sup>という事実を鑑みれば、学校教育の延長上に修学旅行が位置付けられていたことは疑い得ない。

1906年7月13日には、文部省と陸軍省の共同事業により全国中学校合同満州旅行が実施されるが、その目的は上で述べた視察や一般の観光旅行団のように、中国東北地方の日露戦争の戦跡巡りであった<sup>37</sup>。このことからすれば、その目的の本質は、「将来、国民教育に直接たずさわることになる人物、未来の教師たち」たちにも日露戦争勝利の自負心と、帝

国日本領土の広大さを見せつけるための、いわば帝国臣民を育成する旅行であったと考えられよう。

また、1906年には、広島高等師範学校も満州・朝鮮の修学旅行を実施する。以下ではその旅程と目的とを考察してみよう。この修学旅行の目的は、『満韓修学旅行記念録』によれば、当時の校長であった北條時敬が以下のように語っていることが示唆的である。すなわち、「満韓地方を歴視して多種の学術的問題に接触したり。また教育を職務とすべきものの立脚よりみて。また多様の問題を附興せられたり。満韓地方の旅行すでに終わりて、今なお彼地方の實景が吾人の胸臆に徘徊するのは、これら實際問題が吾人に抱持せられて常に其講究解答を待ちつつあるが為なり。即ち吾人の学術的さらに教育的思想上に活動的態度を有らせしむるものにして。何の利益か之より大なるものあらんや」<sup>38</sup>。

この文章の冒頭に書かれている「問題」とは、武力を以って発展したる国勢伸張を確立するに必要となる基礎は何か。植民地的国民の性格はどのようにして養うべきか。外国人との安寧幸福を共有して海外に信義を維持し、そして上位に立つべき商業者の素養はどのようにすべきか、劣等人種を愛撫する情念とを養うことは移住国民に対し目下要求すべきかなど、様々な意味を内包するものであるが、このような問題の解決が最大の利益だと考えられており、それこそがこの修学旅行の目的であるというのである。また、陸軍少尉伊崎良熙による『南山戦況講和筆記』には、以下のようなことが書かれており興味深い。「諸君は満韓の天地に俯仰し忠臣義士が熱血をそそぎ、身命を君国に致したる幾多現戦場の跡を歴訪して果たして如何なる教訓を成得せられたるか。…況や諸君は帝国民兵の制度によって他日必ず武器を手に入れたる名誉なる御国の任務を負い、一旦緩急あらば、義勇公に奉すべき日本男児たるをや。なお況や帝国の前途の盛衰消長ことごとく懸かって諸君の双肩にあるをや」<sup>39</sup>。

ここでは、しきりに国を背負うものとしての自覚が促されている。つまり、ここにおいても修学旅行の目的は、日露戦争に勝利した日本の偉大さと、戦争のために亡くなった人々を称えることによって、国に対する義務と愛国心を向上させるという帝国臣民としての涵養であったことが確認される。加えて、満州、朝鮮を植民地として統治すべきであり、どのように統治すべきかについて考えさせることであったといえよう<sup>40</sup>。

また、たとえば同年行なわれた神戸高等商業学校の朝鮮旅行は、朝鮮地域のみが対象地とされたこともあり、満州、朝鮮の両地域を訪問する旅行よりも、幅広いものであった。この際に実施された調査内容も、朝鮮に関する政治、経済、宗教、教育、産業など大変詳しいものであった。但し、旅行目的は上記の広島師範学校と同じ目的であったと考えて良い<sup>41</sup>。

朝鮮への修学旅行は、1920年代に入ると益々増加する。1920年7月号の『朝鮮』には、同年5月の1か月間の国有列車利用団体旅行客は21,408人で、そのうち学生団体は16,900人であったとの記事が掲載されている。夏季・冬季休業中でもない5月に、これほど多く



の団体学生が旅行をしていたことから考えると、朝鮮への修学旅行はかなり一般化されていたということが伺われる。そこでは、「将来、国民教育に直接たずさわることになる人物、未来の教師たち」に国に対する義務と愛国心を向上させるという帝国臣民としての涵養を行い、満州、朝鮮を植民地として統治すべきであり、いかに統治するべきかについて考えさせることを実践したのである。

### (3) 朝鮮人の日本への観光

朝鮮総督府は、日本人に対する満州・朝鮮旅行の斡旋を進めたのと同様に、朝鮮人や満州の中国人に対する日本への観光旅行を積極的に推し進めた。「内地観光団」や「内地視察団」などと称された日本への観光団は、朝鮮総督府や新聞社、その他各種団体などの主催で行われた。

朝鮮人に対する最初の内地への観光団は、韓国併合直前の1909年に『京城日報』が主催して組織され、実施された。先行研究は、「京城日報は、当時大岡力が社長を務めていたソウルの日本語新聞で、自他ともに認める韓国総督府の機関紙であった。そうした新聞社が組織した観光団であるから、単なる物見遊山の観光ではなく、政治的狙いを持っていたことは明らかである。観光団のメンバーはいずれも韓国政界の有力者で、しかも親日的な一進会に属するものは一人もおらず、反日的傾向が強い大韓協会員が八割方を占めていた。反日的、嫌日的な韓国政界官界人に日本の強大さを見せ、切り崩そうとする工作であったとされる」<sup>42</sup>と分析する。すなわち、日本の発達した工業施設や軍事施設を参観させることで、日本に対する対抗意識を恐怖心に転化させるという狙いがあったということである。詳細は次の節に譲るが、反日的、嫌日的な朝鮮人の切り崩しという目的の他に、「内鮮融和」という目的もあった。

ところで、植民地下の国民に対して内地観光団を結成し、内地観光を積極的に支援したのは朝鮮・満州や台湾のみならず、南洋群島でも行なわれていた<sup>43</sup>。植民地朝鮮の内地観光団に対して、朝鮮総督府が積極的な奨励と支援を行っていたことと同様に、南洋群島においても当時、その初期の南洋群島統治機関である、臨時南洋群島防備隊によって積極的な奨励と支援が行われていた。内地観光は、当時の日本政府の普遍的な方針であり、その目的も日本の優越性を実感させることにより、日本への帰服を促すということが背景にあったのである。

### (4) 博覧会と観光開発

最後に、植民地統治政策と観光という本節のテーマにそくして、博覧会を取り上げ検討してみることにする。1907年に開催された東京勸業博覧会において、「朝鮮館」のすぐ隣に建てられた水晶館で朝鮮人の男女ふたりを浅黄の服装を身につけさせて徘徊させたというエピソードに関して、吉見俊哉は次のように分析する。「20世紀に入ると日本においても博覧会は、たんに新しい『文明』を垣間見、技術を習得していく場という以上のものになっていた。日清・日露戦争による植民地の獲得と資本主義の発展を背景に、日本の博覧

会は、次第に「帝国」として自国の地位を植民地の「未開」との距離において確認する装置になっていったのである<sup>44</sup>。

韓国人研究者の崔錫榮も、1929年に朝鮮で開催された「朝鮮博覧会」について、「日帝が単に国内・外的に朝鮮の発展された姿を見せようとした行事ではなかった。どのような博覧会であれそれなりの意図と目的があり開催されるが、朝鮮博覧会は植民地下の状況の中で、朝鮮博覧会史上初めて異民族が企画した全国的な規模の視覚的な知が作られた教育の場であった」とし<sup>45</sup>、「日本は視覚的で映像的な展示方法を通じ、日帝＝支配権力（恩恵を与える立場）、朝鮮＝従属的な立場（恩恵を受ける者）という両極的なイメージを演出しようとした」とその意図を分析している<sup>46</sup>。

朝鮮総督自身も、朝鮮博覧会の開催目的を「疆内における施政全般の状態を一場に展示以て本府経営20周年の実績を明らかにし、且つ将来の発展に資し、又疆内外各地の出品により相互紹介に便することに在るが此の機会に疆内数人士に朝鮮の実視を乞い朝鮮に対する正しき理解を得、朝鮮の開発に寄与せられんことを切望して己まないのである<sup>47</sup>」と述べている。すなわち、博覧会は産業の振興と文化の普及を図るという一般的な目的の上位に、朝鮮総督府施政の実績や「日本」⇔「朝鮮」の「開発」⇔「未開」の差別化、日本－朝鮮の従属関係の視角化を決定づけるということが目的であった。さらに、とりわけ朝鮮で開催されていた博覧会には、日本及び朝鮮内からの多くの観光客が参加しており、観光集客の役割を果たしていたことも見逃せない事実である。

### 3. 植民地下における女性と観光

#### (1) 朝鮮女教員内地学事視察

この節では、上の第2節に対応して、朝鮮人の日本への観光旅行について、女性を対象を絞って検討を行うことにする。朝鮮人が日本への観光旅行を組織的に行う際には、「内地観光団」という名称で呼ばれることが多い。その内地観光団には、朝鮮の教員、朝鮮の学生の父兄を中心とした「教育観光団」や修学旅行、各地方財産家、地方官吏で構成される観光団など様々な対象を包含する形態が見られる。とりわけ、朝鮮人教員を中心とした教育観光団は1918年から実施されている。

たとえば、1934年4月20日、李王家御慶事記念会主催地学事視察朝鮮女教員団が日本へ派遣された。そもそも、李王家御慶事記念会とは、「極東の平和 延いては世界平和、人類文化の貢献のために日韓併合ということはお互いの幸福に大なる一歩を進めたのであったが、李王家と梨本宮家の御行事はまたさらに歴史的なご英断でわれらはそのあまりに深き御思し召しに恐俱之至りに堪えない、これに發奮して多少の内鮮融和の進めに盡したい<sup>48</sup>」との趣旨により創設された組織である。

この視察団の目的は、報告書に記されているところによれば、日本の権威を確認させ、内鮮融和を進めるとの狙いであったとされる<sup>49</sup>。この視察団には、名誉団長の柳原吉兵衛

をはじめとする3名の日本人、幹事の京城種花女学校教員の金東玉に加え、朝鮮各地の学校から集められた団員18人から成り立っていた。一行は、4月20日に釜山を出発し、5月7日までの20日間で、京都、伊勢、東京、日光、奈良、大阪、堺、宮島を巡っている。具体的には、伊勢皇太神宮、明治神宮の参拝、新帝国議事堂の見学、首相官邸での齋藤首相夫婦による接待を受けるなどという行程が見られる。また、奈良では、奈良女高師の二十五周年記念式に参列し、大阪では知事官邸別館で官民多数の歓迎を受けたという。このような旅程を終え、団員たちは、報告書の中で様々な感想を述べている。

以下には、論旨にそくして主なものを掲げておこう。すなわち、「内地の児童は幼き時より家庭において父母の慈愛の教育を受け、父母と共に神の教育を受け、成長するにますますの敬う心養われ、神社崇拜の念が培われ、全国民の信仰の心に集中し、之により国民的精神は統一され、純化され国家的観念が啓培される」<sup>50</sup>、「われらを守る兵隊さん、教育の完成は立派な兵隊に仕立て上げること」<sup>51</sup>などといったような感想が散見される。

この視察団に参加した女性たちは、教員であるということもあって、この視察で観察した事柄を朝鮮の地で実行することが求められた。つまり、教育の場における知見の還元である。これにより、視察の目的のひとつである、内鮮融和にそくした形で、児童を教育することが求められたのは疑い得ない。とりわけ、教育観光団は日本の朝鮮への修学旅行がそうであったように、否即戦力として植民地政策の一助として利用されたと言えよう。

## (2) 女性を活用した植民地観光戦略

上述したように、女性観光植民地政策が関係づけられるのは、何も教育の場に限ったことではない。植民地政策を正当化づける観光戦略は、女性そのものを活用し展開されるのである。たとえば、北タイ山地のアカ族が作り出した女性のイメージを考察した研究において、「観光という、優しい笑顔できめの細かいもてなしを売り物にするサービス産業において、女性は重要な役割をはたす。観光産業は女性の雇用機会を増やすのみならず、女性のイメージは観光客を誘致するために欠かせない要素となっている」ということが指摘される<sup>52</sup>。

こうした他の地における考察を挙げるまでもなく、女性を利用した観光客誘致は、朝鮮総督府鉄道局によって十分になされている。特に、朝鮮妓生はその役割を担いうるに十分な存在であり、朝鮮旅行を促す要因ともなった。このことは、戦後の韓国における日本人男性向けの観光客誘致政策にも影響を及ぼしたのではないかと考察が可能であり、興味深い事柄である。

それはともかく、朝鮮総督府鉄道局により発行された朝鮮案内絵葉書は、自然、歴史的な建物、名勝地などの朝鮮の風景が主だった図案である。ただ、人物の絵葉書も数多く、そこでは朝鮮の妓生がもっとも多く図案化され発行されている。妓生は、絵葉書だけでなく、様々な朝鮮旅行案内に多く使われていた。

そのみならず、妓生は、1922年に行われた東京平和記念博覧会の朝鮮館において、案

内役を担わされ、京城の妓生12名が踊りを披露するなどした。また彼女らは、様々なところから招待を受け、会食し踊りなどを披露したという。『朝鮮』には「単に朝鮮芸術の紹介の目的を全うしたのみではなく、夫れ以外に、又より以上に、内鮮衷心よりの親和融合上に少なからざる好影響を興へたることは信じて疑わぬのである」ことが掲載されている<sup>53</sup>。

男性をターゲットとした、この妓生という性を利用した観光戦略は、個人観光客はもちろん、視察という名の観光団にも人気があったようである。京城の妓生は、官製の絵葉書の図案に多用されただけでなく、自らで絵葉書も発行していた。そのなかでも人気のある妓生の絵葉書は飛ぶように売れたということが当時の旅行案内に記載されており、また同じ案内には、「せっかく京城に来たのだから、妓生だけは是非呼んで楽しむこと」をすすめており、妓生は日本語がよく分かるし、態度物腰が優雅であると述べられている<sup>54</sup>。

こうした視察の案内書に妓生のことが詳細に紹介されているのは、既に妓生に関する絵葉書や関連書籍が数多く刊行されていたからであろう。妓生に関して最も詳細に描かれた著作は、妓生の歴史、官妓の勤め、妓生の歌舞などを綴った『妓生物語』である<sup>55</sup>。この著作の中の「朝鮮視察と妓生」では、特に視察の際には妓生と遊ぶことを勧める節が設けられており興味深い<sup>56</sup>。視察団として参加していた人々や個人観光客の感想を集めた文献などにも、多く妓生に接待されたことや遊んだことが述べられている。こうした事実を鑑みると、妓生が日本人男性の朝鮮への観光客誘致に影響を与えたということ、またそれを背後で仕向けた朝鮮総督府鉄道局の性を利用した観光戦略は成功したということが言えるであろう。

#### 4. 植民地と戦後の観光政策

最後に節をかえて、朝鮮総督府の観光政策が戦後の韓国の観光政策にどのような影響を及ぼしたのかについて初歩的な検討を行ってみることにする。戦後韓国における植民地政策の影響が伺われる格好の事例としてしばしば取り上げられるのは教育現場である。例えば、近年の韓国研究者による研究では、戦後韓国における体育教育は、植民地時代の教育方法が数多く残存している好例だとし、それは日本人の帰還によって空席となった教師及び教育官僚に、植民地時代の韓国人教師が競って従事していったことが、教育現場の「日本化」を維持する要因になったと主張している<sup>57</sup>。

このことは、植民地時代において観光活性化に大きな役割を担った朝鮮鉄道においても同様のことが言える。日本人職員が帰国したことにより、戦後の朝鮮鉄道は朝鮮人職員にそのまま引き継がれ運営されることになった。1945年の終戦直前の時点で、朝鮮鉄道の朝鮮人従業員の割合は70%であった。むろんのこと、上級職員の割合は少なかったが、10%程度の割合は占めており、戦後の鉄道運営にもほとんど支障なく引き継がれた。鉄道以外の施設や宿泊施設など、植民地時代に整備されていた観光インフラや植民地時代に開発された観光名所、温泉施設などもそのまま引き継がれ、韓国政府に利用されることによって、

戦後の観光近代化に多大な影響を与えた。

1970年代から1980年代までの韓国では、とりわけ外国人観光客誘致に積極的であった。外国人男性観光客、特に日本人男性観光客の誘致が国家政策であったといっても過言ではない。韓国人には厳しく取締りをしてきた行為も外国人観光客には寛大であった。外国人観光客を相手にしていた女性には、「風俗店就業証明書」を発行し、ホテルの出入りが黙認され、深夜の12時になると通行禁止が実施されていた当時、この証明書さえあれば通行が許可されるという配慮までなされていた。政府が公に外国人観光客に勧めたわけではないが、外貨獲得という名目で性が商品化されたのである。

1983年に発表された資料によると、外国人男性、主に日本人団体男性客を対象とした妓生パーティという名の売春が斡旋される妓生ハウスは全国に25か所を数え、500名にのぼる女性が働いていると報告している<sup>58</sup>。1976年から1982年までに韓国を訪れた日本人観光客の男女比率は男性が90%～96%であった。ちなみに、「韓流ブーム」と称される2005年の日本人観光客の男女比率はほぼ拮抗している。観光風俗産業を調査し日本語で翻訳された研究によれば、1970年から1980年代初めまでに日本人男性観光客が台湾と韓国を訪問した理由について、その要因に植民地支配を挙げており、両国が日本と近似しているからだとして述べている<sup>59</sup>。韓国政府が行なった観光戦略は、故意に妓生を表面化していることなどから察して、植民地朝鮮で行なった女性（妓生）を活用した観光戦略の影響が明らかであり、日本人男性観光客が韓国を訪れたのも植民地支配の影響であると考えられることは今後の研究において示唆的である<sup>60</sup>。

## おわりに

小論では、以上において、観光の大衆化と鉄道発達との関係性について、また日本人の朝鮮観光旅行、朝鮮人の内地観光旅行を通じて、観光と植民地政策との関連性について検討してきた。さらに、こうした考察に関係づけて、女性 観光 植民地政策の連環性について論じてきた。そこで理解されるのは、植民地政府が正統性確保のために観光を利用するという普遍性である。植民地主義と観光との関係性に関して、バリ島の事例を取り上げ考察を行った研究は、次のように結論づけている。すなわち、「植民地政府が観光事業へ積極的な姿勢を示したのは、政府にとって観光が経済的な利潤以上のものをもたらす魅力的な対象であったためである。その魅力の1つが統治の正統性の確保という政治的意図を実現する場としてであった」<sup>61</sup>。また、「バリ人に伝統文化を押しつけ、それによって民族運動へと人々を誘う近代思想からバリ人を遠ざけようとした」<sup>62</sup>とし、植民地政府がバリ文化保護政策を取ったのは、植民地政策の良き統治者であることを示すためであったという。つまり、バリ植民地における文化保護政策の延長線上にバリ観光開発があったというのである。

こうしたバリ島における植民地政府の意図と朝鮮における植民地政策とは、上述してき



た通り、重なる部分が多々見受けられる。文化保護の延長線上に博覧会や観光開発があったことは明白である。これに関連して「朝鮮総督府も朝鮮の古跡や文化財保護に積極的な政策を取り、植民地支配を正当化した」<sup>63</sup>とする研究もある。さらに前出の崔錫榮は、日本植民地時代のある「観光名所化」開発過程を取り上げ、朝鮮における観光名所化の理由は古代日本と朝鮮との関連性を図るためであったと主張している<sup>64</sup>。また、植民地化の朝鮮人の日本視察団や観光団を日本植民地政府が積極的に推進した理由として、「日本植民地支配下において、萎縮した朝鮮と第1次世界大戦を契機に豊かになった日本を比較させ、日本の強大さと朝鮮の自立不能を内包した独立不能論を朝鮮人の頭に認識させる政治宣伝の意図」<sup>65</sup>があったと述べている。

このように、植民地と観光開発を論じる際には、植民地政府の意図として植民地統治の正当化を挙げることが多い。彼らの指摘は、小論の分析とも適合しており、植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策を考察する上で示唆的であろう。

観光開発は、朝鮮総督府の手によるところが大きく、通信、宿泊施設、観光客誘致のためのパンフレットや観光映画の作成によって可視化され、実際のインフラ整備と並行して両輪の役割を果たした。鉄道の発達近代ツーリズムの勃興となったことと同様に、朝鮮の鉄道整備は、朝鮮への観光客の増加及び朝鮮観光の近代化の牽引役を果たしていたといえる。

観光施設が不十分であった植民地朝鮮を、日本が近代的な観光地に仕立て上げることは、広義には、未開の地としての朝鮮を日本が植民地化することそのものの試金石であり、そういった意味において、朝鮮の観光開発の成功は、日本の植民地政策の成功を意味するものであった。実際に、朝鮮総督府が博覧会を主催し、積極的に出展していた意図と目的は、朝鮮に対する植民地政策が成功していることを日本や外国にアピールするためであったことが資料などで明らかになった。むろん、開発の内実がいかなるものであったのかということについては、未だ検討の余地があることはいうまでもない。

また、植民地政策の成功は、単に植民地支配の正当化のアピールに過ぎないという側面もある。博覧会と同様に、観光も植民地政策の宣伝に利用された。朝鮮総督府が積極的に観光開発をしたのは、植民地政策の宣伝のためであり、それは植民地化を正当化することにもつながる独善的なものであった。しかし、ともあれ朝鮮半島における観光「近代化」は植民地期において形成されたものであり、それは戦後の韓国政府において引き継がれていった。

小論では、「植民地を行った側の資料」を中心に用い検討を行ったという点で限定的ではあり、観光開発や博覧会の開催は植民地政府の一方的な意図や目的があったことを認めながらも、これらの観光開発が先行研究の主張する近代ツーリズムの発展につながったこと及びそれが戦後にも引き継がれているのではないかということに着目した。むろんのこと、植民地初期から終戦までの植民地政府としての観光政策の詳細な変遷過程を辿ることはできなかったし、また戦後の韓国政府による観光政策が植民地観光政策をどのように引き継いでいったのかにも言及することができなかった。この点は今後の課題としたい。

## 注

- 1) 日本の朝鮮半島における植民地政策は、概ね次のように論及されることが一般的である。「日帝は、1929年世界経済恐慌から逃れるために、1930年代に入り本格的に大陸侵略戦争を開始した。彼らは大陸の侵略のため植民地朝鮮において日本の独占資本、特に軍需工業を建設するために莫大な資本を朝鮮総督府の恩恵と保護の下で朝鮮に進出させた。日帝産金奨励政策を中心に多的に地下資源を略奪し港湾・鉄道などの軍事施設を拡大させていた」(김용정 「1930년대 초 태평양 노동조합계열의 혁명적 노동조합 운동」 『식민지경제 구조와 사회주의운동』 역사학연구소, 1998년, 127쪽 [キムヨンジョン 「1930年代初太平洋労働組合系列の革命的労働組合運動」 『植民地経済構造と社会主義運動』 歴史学研究所, 1998年, 127頁])。「日本は京釜鉄道と京義鉄道の敷設の際に文字通りの帝国主義的侵略と奪取を暴力的に行ってきた」(정재정 『일제침략과 한국철도』 서울대학교출판부, 1999년, 638쪽 [鄭在貞 『日帝侵略と韓国鉄道』 ソウル大学校出版部, 1999年, 638頁])。「日帝侵略時期における韓国鉄道は、韓国人にとっては文明の機器よりは侵略と支配、奪取と分裂、弾圧と差別の道具として機能した」(동상, 631쪽 [同上, 631頁])。
- 2) 曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003年、57頁。
- 3) 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道40年略史』朝鮮印刷株式会社、1940年、521 - 533頁。
- 4) 「統監府鉄道管理局設置せられ古市公威鉄道局長官に任ぜられ総務部、運輸部及び工務部を設く」(同上、526頁)。
- 5) 「草梁及び南大門駅に鉄道案内者を配置」(同上、527頁)。
- 6) 「観光外人に対する乗車券の代理発売をトーマスクック・アンドソン商会及び英国寝台会社東洋支配人と協定実施す」(同上、528頁)。
- 7) 「統監府管理局制を廃し統監府鉄道庁を設置す」(同上、528頁)、「鉄道院の所管に移り韓国鉄道管理局設置され統監府鉄道庁廃止さる」(同上、529頁)、「我が国鉄道行政統一の必要に基き、朝鮮の鉄道を鉄道院の所管に移す方針を決定した」、「朝鮮に於て我国の経営する鉄道を鉄道院に移管することに依って、我が国の内外に互る鉄道行政は悉く一元的に統制せられたが、是等は戦後我が国の対満及び対鮮政策上の一階梯として実施されたのであった」(同上、83頁)。
- 8) 『鉄論』朝鮮鉄道協会、第2巻第1号、1923年、35 - 37頁。
- 9) 前掲、『朝鮮鉄道史四〇年略史』564 - 565頁。
- 10) 金剛山電気鉄道株式会社編、『金剛山電気鉄道株式会社廿年史』金剛山電気鉄道株式会社、1939年、70頁
- 11) 朝鮮における植民地以前の観光については、詳細なデータを提示することはできないが、紀行文などから交通の不便や費用により観光は、上流社会の人にしかできなかったことを察することができる(李良姫『金剛山観光の文化人類学的研究』2004年度広島大学大学院国際協力研究科博士學位論文 [未刊行]、12 - 18頁)。
- 12) 前掲、『일제침략과 한국철도』 [『日帝侵略と韓国鉄道』] を参照。
- 13) 「北部線の建設は、昭和三年二月安邊・歙各間三一杆餘の路盤工事着手に始り、昭和十二年十二月襄陽迄百九十二杆六分を開通し、目下襄陽・三陟間百三杆九分及び東幕・梅院間三杆を工事中であるが、既業線の沿線には世界的な名勝金剛山あり、又其の附近に海金剛を接見する事も出来、特に高城・襄陽間では海産物及び林産物の開発を促進せしめたのである」(前掲、『朝鮮鉄道史四〇年略史』270頁)。

- 14) 韓国統監府及び朝鮮総督府が発行した主な旅行案内書は以下のようなものがある。『韓国鉄道路線案内』(1908年)、『朝鮮鉄道路線案内』(1912年)、『湖南線線路案内』(1914年)、『朝鮮鉄道駅勢一斑』(1914年)、『京元線写真帖』(1914年)、『京元鉄道案内』(1914年)、『朝鮮鉄道旅行案内』(1915年)など。
- 15) 統監府鉄道管理局『韓国鉄道線路案内』日韓印刷株式会社、1908年。
- 16) 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道線路案内』日韓印刷株式会社、1912年、61頁。
- 17) 朝鮮総督府『朝鮮』1938年2月、142頁。
- 18) 前掲、『植民地台湾と近代ツーリズム』85頁。
- 19) 「朝鮮総督府告示第百七十四号 朝鮮総督府鉄道局ト金剛山電気鉄道株式会社、江原自動車商会及朝鮮郵便株式会社ト連帯シ金剛山探勝連絡乗車券ノ発売及連絡手荷物ノ取扱ヲ開始ス 大正十五年五月二十四日 朝鮮総督 子爵斎藤實」(朝鮮総督府『官報』1926年5月24日、第4127号)。
- 20) 「韓国の幹線鉄道は、最初から国内各地域の間の物資流通よりは基本的に国外流通、すなわち日本～韓国～満州の間の兵站及び商品輸送のためを目的として敷設されたとみられる」前掲、『일제침략과 한국철도』[『日帝侵略と韓国鉄道』]を参照。
- 21) 「満鮮委託経営は寺内内閣時代に行はれたが、明治四十三年初代朝鮮総督として着任以来鋭意多年の秕政を改革して、聖代の鴻恩に浴せしむる基礎を確立し、又日露戦争前後を通じて陸軍大臣の要職にあった大將は、戦後多難な第一総督として識見高邁然として重きを為したが、常に日露戦後の我国の大陸経営に腐心するところあり、新領土の治統舉るや、支那に対する根本的国策樹立の必要を認め、我国の權益下にある満州における所謂四頭政治の弊害を除去し、鮮満を一元化した経済的發展を画策すると共に、鮮満鉄道を一元化せんとの意見を抱いて居た。其の片鱗として三線連絡運賃問題を提起し、半島縦貫線を大陸経営の根幹たらしむべく大いに努力するところがあった」(前掲、『朝鮮鉄道史四〇年略史』90頁)。
- 22) 南満州株式会社が発行していた朝鮮案内書には以下のようなものがある。『朝鮮鉄道案内附金剛山探勝案内』(1918年)、『朝鮮鉄道旅行案内』(1921年)、『朝鮮の私鉄案内』(1921年)など。
- 23) 「満韓観光団」は、1887年から1910年までの「大韓帝国」時代行われていた観光視察団であり、本文では観光団名は「満韓観光団」を使い、地名は「朝鮮」を使うことにしている。当事、発行された主な視察報告書には以下のようなものがある。『大阪産業視察報告書』(1904年)、『韓国視察録——農事に関する部』(1904年)、『平安北道教育視察団視察経過及感想一斑』(1910年)、『満韓観光団誌』(1911年)、『満鮮葡萄産業視察報告書』(1914年)など。
- 24) 「日露戦役の結果、満韓の地は我勢力範囲に帰し、今や將に世界大陸の一端に、我鵬翼を張らんとするの時に當り。日本人たるもの、官と民と其地位の如何を問はず、大いに同地を視察研究し、以て拓殖發展の策を講ぜざるべからず、唯徒に当局者の為すに一任じ去りて願ざるが如きは到底余等の満足し能はざる所あるなり」(下野新聞社『満韓観光団誌』下野新聞主権栃木県実業家満韓観光団、1910年、3頁)。
- 25) 「朝鮮は実に貧弱国で、日に日に自滅に近づきつつある。住民は農を主とする人口約1千万、体力は強いが誠に憐れなもので、恐らくは商工業上に就て物産なきには諸君も失望されることと信ずる。是れ今日の疲弊を來した原因である」(同上、41頁)、「人民は貯蓄心なく儲ければ即ち田地を買ひ。位階を買ふのを最上の希望として居る近年日本の保護を受け、生命財産の安固を得たれば是より貯蓄心も出来るやうになるでありませう(同上、42頁)。

- 26) この旅の旅程は、まず、横浜を出発し、神戸、大阪を経由して、呉に向かった。途中の神戸では、日露戦争において活躍した船舶を製造していた川崎造船所を見学し、呉でも海軍工廠を見学した。その後、門司で若松製鉄所も見学している。
- 27) 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年、47頁。
- 28) 1921年に全国中学校長たちが満鮮視察のために立ち寄った朝鮮で設けられた招待会席上で、「朝鮮は日本の領土であるにも係わらず、割合に朝鮮の事情が内地によく了解されて居らぬと云う感もありますが、今後社会に活動すべき青年、すなわち諸君などの教養されて居るところの青年の人たちに対しまして、朝鮮の事情を良く理解することは、帝国の朝鮮に対する関係においても、また我々が朝鮮を統治していく上におきましても、極めて必要なことと存するのであります」と述べた(水野鍊太郎「朝鮮統治の根本義に就いて」『満鮮視察の全国中学招待会席上に於ける演述』朝鮮総督府、1頁)。
- 29) 「諸君のなかには朝鮮へは始めてお出になった方も多かろうと思しますので、この機会において、朝鮮の事情並び朝鮮統治の方針などについて、概要を申述べて諸君のご参考に供にしたいと思うのであります」(同上、1頁)。
- 30) 「日本にも接近して居るし、又支那にも境を接して居る、更に近くは露領とも地帯を接して、それらの諸強国の間に介在していたのでありますから、従来朝鮮は独立国の当時におきましても、或は支那に貢献し、或は日本と結び、時に依れば露西亜にも款を通ずると云うようなわけで、政治上はもちろん経済上においても、その他の事柄においても、それら諸強国との間に色々な関係を有し、非常に錯雑した因縁があったのであります。朝鮮が他国の勢力圏内に移ることは、我が日本帝国の地位に重大なる影響を来すと云うことは申すまでもないのであります」(同上、2頁)。
- 31) 同上、3頁。
- 32) 白幡洋三郎『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』中公新書、1996年、14頁。
- 33) 修学旅行協会『修学旅行の全て』Vol. 22、日本修学旅行協会、2003年、159頁。
- 34) 「修学旅行記という記事が『東京茗溪会雑誌』第47号(19年12月)に掲載されている」[埼玉県師範学校では、2月、寄居付近に一泊の遠足を実施、兎狩りを行う。校長以下が百名参加した。第一高等学校(旧制一高)は春季休業中に、府中地方へ二泊の行軍旅行をし、演習を実施する](同上、160頁)
- 35) 同上、162頁。
- 36) 同上、164頁。
- 37) 同上、164頁。
- 38) 北條時敬「満韓修学旅行記念録」『明治幕末中国見聞録集成』広島高等師範学校、1907年、14 - 15頁。
- 39) 同上、456 - 457頁。
- 40) 「1907年の7月1日に文部省によって満韓地を旅行するものに対して多大な便宜を与えると提示された。7月6日になると旅行者申し込み者が150名余りになった。旅行者の骨格検査、衛生上の講話、整列服装検査などを行った後、19日に出発した。大連、旅順、營口、遼陽、奉天、鐵嶺の各地を歴視し、分かれて昌圖の府市、撫順の炭坑等の概況を目撃し、又一小部隊の安泰輕便鉄道により、韓国に出た(同上、1頁)。
- 41) 「韓国が我国の保護国たるべきことに関しては世界各国の將に公認するところであり、今後日

- 韓の關係は益々密接になるに至るべく遂に韓国は日本内地の延長として考えられ、盛に此地に殖民し開拓を行い教育し指導する責任を有するものと云うべく、「50日の休業を利用して深く韓国内地を旅行してその現状の一般を知らせることが目的」(神戸高等商業学校『韓国旅行報告書』神戸高等商業学校、1906年、1頁)。
- 42) 前掲、『海外観光旅行の誕生』157頁。
- 43) 千住一「日本統治下南洋群島における内地観光団をめぐって」『「観光のまなざし」の転回越境する観光学』春風社、2004年、131 - 146頁。
- 44) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年、214頁。
- 45) 최석영『한국근대의 박물관』서경문화사、2001년、33쪽 [崔錫榮『韓国近代の博覧会・博物館』書景文化社、2001年、33頁]。
- 46) 동상、34쪽 [同上、34頁]。
- 47) 齊藤実総督「朝鮮博覧会に際して」『朝鮮』(1929年朝鮮博覧会記念号)第173号。
- 48) 北川清之助『朝鮮女教員学事視察報告書』共盛堂印刷社、1934年、8頁。
- 49) 「短時日の中に最善の努力をなし、以って有益有効に母国の進歩せる文化の吸収に努め、わけても皇国精神の顕揚に目覚めつつある我國民が如何に精神的に蘇りつつあるか、などに親しく接したく」(同上、1頁)。
- 50) 同上、82頁。
- 51) 同上、84頁。
- 52) 豊田美佳「観光と性観光と性 北タイ山地の女性イメージ」山下晋司編『観光人類学』新曜社、1996年、131頁。
- 53) 前掲、『朝鮮』第173号、72頁。
- 54) 東文雄『朝鮮、満州、支那、大陸旅程案内』東学社、1939年、15 - 16頁。
- 55) 吉川萍水『妓生物語 裏から覗いた朝鮮』半島自由評論社、1931年、6 - 14頁。
- 56) 「とまれ斯趣味と実益の両天秤で、朝鮮行脚をする人々に、わしの国さでみたいものを詳しく書き並べる余裕もないが、そのスケジュールの中に、是非共もう一つ加えて欲しいのは、妓生と朝鮮料理に接触して、その眞価を味つて頂くこともある。諸君が忙中一夕を割愛して、旅行のうさ晴らしに朝鮮旗亭の金看板をくぐるが……妓生は温泉地にも居るし、近頃は内地の都会にも進出しているが、へたするとインチキな似非物に引つ懸かるから、矢張り本場の一流ところにするのが得策だ。……其処には夏涼しく冬暖かいオンドル座敷が、いそいそと遠来の客を迎える」(同上、12頁)。
- 57) 유근직「일제식민지시대의 체육이 광복 후 한국 학교체육에 미친 영향에 관한 연구」『한국체육학회지』제40권제2호、2001년、33 - 44쪽 [ユグンチク「日帝植民地時代の体育が戦後韓国体育に与えた影響に関する研究」『韓国体育学会誌』第40巻第2号、2001年、33 - 44頁]。
- 58) 한국교회여성연합회『기생관광: 전국 4개지역 실태조사보고서』、한국교회여성연합회、1983년 [韓国教会女性連合会『妓生観光: 全国4地域実態調査報告書』、韓国教会女性連合会、1983年]。
- 59) 申惠秀・金早雪訳『観光風俗産業の政治経済学 従属的發展とセクシャルサービス』新幹社、1997年、49頁。
- 60) 「韓国では、売春旅館での売春には厳しい管理と無情な待遇がなされるのに、こと相手が外国



人旅行者か米軍関係者だと事情は異なってくる。観光の積極的な奨励策は1980年代初期に始まるが、外国人に売れる商品リストには女性の性も含まれていた。政策担当者が積極的に性を売りものにする事とはないにしても、それを擁護してきた」(同上、49頁)とし、「風俗店就業証明書」の発行や駐日韓国大使館が発行した旅行案内にキーセンハウスの電話番号が掲載されていることなどから韓国政府の女性を活用した観光戦略が伺える。また、植民地朝鮮で女性を活用した観光戦略を行ったことは、当時発行された各種案内書や旅行パンフレット絵葉書などから察することができ、日本人男性が女性を求めて韓国を訪れたことも植民地支配の影響とは無関係ではないと思われる。

- 61) 永淵康之「観光＝植民地主義のたくらみ 1920年代のバリから」山下晋司編『観光人類学』新曜社、1996年、35頁。
- 62) 同上、38 - 39頁。
- 63) 최석영『일제의 동화이데올로기창출』서경문화사、1997년、250 - 251쪽 [崔錫榮『日帝の同化イデオロギー創出』書景文化社、1997年、250 - 251頁]。
- 64) 최석영「일본식민지 상황하의 부여고적에 대한해석과 '관광명소화」『비교문화연구』제9집1호、2003년、서울대학 비교문화 연구소、129쪽 [崔錫榮「日本植民地状況での扶餘古跡に対する再解釈と '観光名所化」『比較文化研究』第9集1号、2003年、ソウル大学比較文化研究所、129頁]。
- 65) 강동진『일제의 한국 침략 정책사』한길사、1980년、49쪽 [姜東鎭『日帝の韓国侵略政策史』ハンギル社、1980年、49頁]。

### 参考文献（注書きしたものを除く）

- 鏡味治也『政策文化の人類学せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民』世界思想社、2000年。
- 高成鳳『植民地鉄道と民衆生活 朝鮮・台湾・中国東北』法政大学出版社、1999年。
- 高媛「ノスタルジーと観光 戦後における日本人の『満州』観光」『国際交流』第23巻第1号、2000年、25 - 30頁。
- ピアーズ・ブレンドン、石井昭夫訳『トマス・クック物語近代ツーリズムの創始者』中央公論社、1995年。
- 石川周行『満韓巡遊団』東京朝日新聞社、1906年。
- 大阪商業会議所『大阪産業視察報告書』株式会社大阪活版製造所、1904年。
- 関東都督府民政部庶務課『満鮮葡萄産業視察報告書』東京印刷株式会社、1914年。
- 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道史』日韓印刷株式会社、1915年。
- 『朝鮮』朝鮮総督府、1920 - 44年。
- 横山一平『韓国視察録 農事に関する部』福岡商店印刷部、1904年。

キーワード 植民地 朝鮮 韓国 朝鮮総督府 観光 旅行 鉄道 女性 妓生

(LEE Yanghee)